

## 「2015年西安交通大学サマースクール参加報告書」

京都大学総合人間学部 2年 三好 雄大

今回のプログラムに参加させて頂いたことで、私は今までメディアなどを通じて間接的にしか知ってこなかった中国を直接的に知ることができました。

具体的に言えば、一つには中国の若者をはじめとした多くの中国の人々が、日本の人々や文化を進んで知ろうとしているということです。例えば、西安交通大学の学生の中には、日本語学科に所属していないにもかかわらず日本語が理解でき、さらに流暢に話すことができる学生がいました。彼らのほとんどは、日本のドラマやアニメを観るのが好きで、見ているうちに日本語を覚えたそうです。また、西安の市街を歩けば、日本の企業と似たデザインの店が数多く見られ、その数は最近増加し始めたと聞きました。これらのことから、日本で生まれたものが中国で好意的に、さらに進んで受け容れられ、もっと言えば流行している現状が伺えました。これらのことを考えるうちに、日本の良い一面を見ることができた気がしました。

その一方で、日本において私を含めた多くの人々は、中国の人々のこうした姿勢とは非対称的な姿勢で中国を認識していると強く感じました。日本において中国の文化や人々に対する良いイメージを共有しようという姿勢が欠けていて、この姿勢が本来日本の人々がとるべき姿勢だという考えに、私はこのプログラムの間に至りました。その第一歩として、中国語を学習することは、中国の人々や文化を知ろうとする上でとても重要であると感じました。これは他の国や地域にも当てはまることだと思います。これから大学生活で、中国語をより深く勉強したいと思います。

今滞在中は、西安交通大学の日本語学科の主に学部4年生と大学院生の方々にお世話になったのですが、彼女らの日本語能力はさる事ながら、私たちに対する親切心にとっても驚きました。日本でよく言われる「おもてなし」を、逆に海外で自分たちが受けたことで、その大切さを再認識できました。彼ら彼女らがいなければ、西安での滞在はやはり多くの問題が生じていたと思います。というのも、私一人で西安交通大学の学生や街の人々とコミュニケーションをとることが、やはり難しかったからです。実際に、西安交通大学の学生の多くは英語を話すことが可能であったため、それほど問題はなかったのですが、街の人とコミュニケーションをとる際は中国語しか通じなかったため苦労しました。この経験も、今後中国語を勉強していく上での良い経験になったと思います。

今プログラムでは、西安市街とその近郊の、とても多くの場所を見学することができました。中国の歴史の中で、かつて都として栄えた西安には非常に多くの名所があり、私の現段階の知識ではこれら全てを把握し理解しながら見学することはできませんでしたが、これから学んでいく上ではとても有意義なものでした。また、西安の土地で育つ穀物を使用した麺類をはじめとした数多くの料理を食べることができ、とても満足できました。

これからの大学生活では、できる限り多くの海外留学経験を積み、自分の視野を広げることで物事をより多角的に、より深く考えられるようにしたいと強く思いました。その際にできる限り自分で主体的に各国を知ることができるよう、各国で話されている言語を進んで勉強していきたいと、思いを新たにしました。